わが社の歴史

キヤノン株式会社

東京・六本木のアパートの一室から始まった

1933年、東京・六本木の瀟洒なアパートの一室に高級カメラの製作を志す、「精機光学研究所」という小さな研究所がつくられました。当時、高級カメラはすべてドイツを中心としたヨーロッパ製でした。「われわれ(日本人)にだって、高級カメラがつくれるはずだ」という大きな夢をもった若者たちが小さな部屋で、こつこつ始めたものづくり。それが当社のスタートでした。やがて、苦労を重ねながらも、進取の気性でカメラの試作に成功。観音様にあやかり「KWANON(カンノン)」と名を付けました。

1935年には製品第一号の日本初の35ミリフォーカルプレーンシャッターカメラ「ハンザキヤノン」が誕生しました(Fig.1)。カンノンを語源とした、ブランド「キヤノン」の始まりです。ハンザキヤノンの販売増加に伴い、目黒へ拠点を移し、工場も新設していく中で、株式会社化に踏み切り、1937年8月10日に精機光学工業株式会社が設立されました。当時は盧溝橋事件を契機とした日中戦争が勃発した最中で、生産したカメラの多くは陸海軍へ納められ、軍需品の生産も時勢を反映して大きな比重を占めていました。また、当時の日本で死亡原因の第一位となっていた肺結核の集団検診用のX線間接カメラは、日本初の製品であり、精機光学の主力製品でした。そして戦争の影が色濃くなってきた1942年9月、御手洗毅が初代社長に就任しました。



Fig.1_ハンザキヤノン

焼け跡から世界へ

戦後は、進駐軍向けを主に事業を再開しました。アメリカ市場では、ライカやコンタックスなどドイツ製高級カメラは日本同様高嶺の花であったが、日本製高級カメラなら

ドイツ製よりかなり安く買えることから、カメラ好きのアメリカ兵がまず手を出し、性能の良さが口コミで急速に広まり、実際、会社には頻繁に問い合わせの電話がかかってきました。そうした進駐軍将兵からの問い合わせでは「Canon、Canon」と呼ばれていることや、1947年8月に制限付きながら民間貿易が再開されたことから、国際的に通用する社名にするため、1947年9月にキヤノンカメラを売る会社「キヤノンカメラ株式会社」へと社名を変更しました。当時はカタカナの社名は珍しく、なかなか社名変更を受理して頂けなかったようです。

戦後の再出発から業績は順調に伸び続けていましたが、1949年のドッジ不況により、急ブレーキがかかりました。 1 ドル = 515円だった為替レートが 1 ドル = 360円となり、当社は厳しい経営環境に置かれることとなりました。その後、1950年 6 月の朝鮮戦争をきかっけに、息を吹き返したものの、進駐軍向けに偏った高級カメラの販売及び小さな国内市場による経営上の脆さが露呈したことをきっかけに、世界に向けたカメラ販売を志すようになりました。

1950年、初代社長御手洗毅は国際見本市出展のために初渡米しました。近代的な工場や豊かな生活を目の当たりにしたこと、又、当時、当社の工場は木造であったため、火災が生じた際の製品の供給不安を指摘されたことから、帰国後御手洗は、世界を相手にするには不可欠と、東京・下丸子に「燃えない」鉄筋コンクリートの工場を建設しました(Fig.2)。また、この頃より人間尊重主義を明確にし、



Fig.2_旧下丸子本社

当社の行動指針の原点となる「三自の精神」の他、「実力主義」「健康第一主義」「新家族主義」の3つの経営方針についても重要性を盛んに説きました。当社社員のあるべき姿は、この頃から不変のものとなっています。

その後、世界進出の第一歩として1955年にニューヨーク・マンハッタンに支店を開設し、自力でのアメリカ市場の開拓が始まりました。1957年にはスイス・ジュネーブに欧州総代理店キヤノンヨーロッパを、1965年にはニューヨーク支店を改組し、アメリカ現地法人としてキヤノン USA を設立しました。1967年には、早くも輸出比率が50%を超えるようになりました。

総合カメラメーカーとしての 地位を固めた「キヤノネット」》

創業以来、高級35mm カメラを手掛けて来た当社が、レンズシャッター式の中級35mm カメラの分野に参入した最初の機種が「キヤノネット」です(Fig.3)。シャッターを押せば綺麗な写真が写せる、シャッタースピード優先式完全自動露出機構を搭載していました。



Fig.3 キヤノネット

高級カメラメーカーが手掛ける中級35mm カメラへの期待と、明るい f/1.9レンズ付きで当時の大卒初任給の2万円を割る価格での販売との予告情報から、カメラ業界から一斉に反発されたものの、1961年1月無事に発売され、1週間分の在庫が僅か2時間で完売という快記録を残し、大ヒット製品となりました。キヤノネットシリーズの中でも1972年発売の「キヤノネット G-II17」は1982年まで11年間にわたって生産販売された超ロングセラーとなり、1機種で120万台がユーザーの手に渡りました。

このキヤノネットの大ヒットにより、当社は高級機種から、中級機種、そして初級機種まで取りそろえる総合カメラメーカーとしての地位を固めることとなりました。

多角化への挑戦「右手にカメラ、左手に事務機」

創立まもなく X 線間接カメラを発売するなど創業当初から多角化を手がけていた当社ですが、1960年代には、従来

の光学・精密機械に電気・物理・化学の技術を加えて、本 格的に多角化を推進しました。

1964年には世界初のテンキー式電卓「キヤノーラ130」を世に送り出し、事務機分野へと進出しています(Fig.4)。1967年には「右手にカメラ、左手に事務機」を経営スローガンとして、1969年にキヤノンカメラからキヤノン株式会社へと社名を変更しました。また、他社の特許に守られ、開発は困難とされていた普通紙複写機の日本初の製品化に挑み1970年についに「NP-1100」を発売、「技術のキヤノン」として、難しい分野での多角化を次々に実現しました(Fig.5)。



Fig.4_キヤノーラ130



Fig.5_NP-1100

1965年より、半導体関連分野への進出を目指しレンズ開 発が始まりました。当時の半導体回路図 (フォトマスク) の露光方式は密着式と呼ばれるタイプが主流でした。この 方式はフォトマスクとウェーハを密着させて回路を露光す るためフォトマスクの傷みが激しく、フォトマスク1枚で ウェーハ10枚程度しか露光出来ませんでした。これに対し て投影方式と呼ばれるものはフォトマスクとウェーハの間 にレンズを介して露光するため、フォトマスクの寿命をは るかに延ばすことが可能となります。この需要に応える新 しいレンズ開発を1968年に成功、1970年には露光装置の開 発にも成功し、国産初のマスクアライナー1号機「PPC-1」 を日米同時発表しました。1975年にはウェーハをセットし た台をずらしながら露光できる「ステップ&リピート」方 式を搭載した「FPA-141F」を発売しました(Fig.6)。当時 の世界最高の解像力を誇るレンズを搭載した当装置は、特 にアメリカにおいて称賛されたものの、高性能レンズ故の 高価格がネックとなったことと、実際の半導体製造では、 まだそこまでの精度が求められていなかったため、販売実 績には結び付きませんでした。



Fig.6_FPA-141F

マスクアライナーの事業が軌道にのったのは1978年発売の「PLA-500FA」からでした。技術的に後退させた近接投影方式を採用し、価格面も市場競争力を持たせた当装置は、大口径化が進むウェーハの動向を先取りして5インチウェーハまで対応可能とし、レーザービームプリンターで培ったレーザー技術を応用したオートアライメント機構を装備、さらに自動基板供給装置を搭載しており、半導体メーカーに高く評価されました。当該装置はその後も改良を続けながら1996年まで続くロングセラーとなりました。

第二の創業(共生の理念)

1970年には、当社は社員5000名超の企業に成長を遂げていました。しかしドルショックやオイルショック、さらに1974年には、電卓の表示部品の不良という大問題が起こり、1975年上期に株式上場後初の無配転落という苦境に陥りました。

1976年、このとき当社が掲げたのは優良企業構想です。 縦串としての事業部制の本格導入や、横串の開発・生産・ 販売システムの確立など近代的経営を取り入れ、「世界の優 良企業」をめざす壮大な構想でした。その場しのぎの策で はなく、高い理想を掲げて社員の力を結集。ときを同じく して、「連写一眼」をキャッチフレーズにした「AE-1」が 爆発的ヒットとなり、苦境から一気に抜け出すこととなり ました(Fig.7)。



Fig.7_AE-1

優良企業構想のもと、当社は発展をつづけます。パーソ

ナルコンピューター社会の幕開けとともに、カートリッジ 方式のパーソナル複写機、半導体レーザー採用のレーザー プリンター、バブルジェット方式のインクジェットプリン ターなど、世界初の製品を続々と誕生させました。また、 生産拠点のグローバル化も推進し、世界の優良企業への道 を着実に登っていきました。

カメラについては、AE-1とその後継機が好評を博し一眼レフカメラ市場でトップの座を堅持していましたが、1985年に競合他社から発売されたオートフォーカス機能搭載の一眼レフカメラの登場によりトップの座から引きずり降ろされました。しかし、1987年には、レンズに超音波モーターを組み込み、完全電子マウントを採用したEOSシステムを完成させ、普及機として「EOS650」を発売、高級機として「EOS620」を発売しました(Fig.8)。その結果、発売後1年も経たずに一眼レフカメラ市場のトップシェアを奪い返すことが出来ました。



Fig.8_E0S620

そして、1988年、創立51年目を迎えるにあたり、第3代 社長賀来龍三郎のもと、第二の創業を宣言。当時まだ一般 的な言葉としてなじみの薄かった「共生」を企業理念とし ました。トナーカートリッジリサイクルをはじめとした先 進的な環境配慮の活動を推進。開発拠点のグローバル化も おこないました。

デジタル化の波に乗る

当社がデジタルカメラ市場に本格参入したのは2000年のことです。コンパクトデジタルカメラ「IXY Digital」(Fig.9)を発売し、コンパクトデジタルカメラにおけるシェアを一気に前年の倍に増やすことができました。

デジタル一眼レフカメラでも、同年に「EOS D30」を発売しています。その後、後継の「EOS Kiss Digital」を2003年秋に、予定の半年前倒しで発売しました。市場投入されるや圧倒的な支持を集めることに成功し、デジタル一眼レフカメラ市場における当社の地位を確たるものとしました。また、2004年には「EOS-1D Mark Ⅱ」を発売。高画質と高速連写機能により、スポーツ・報道分野を中心にプロフォ



Fig.9 IXY Digital



Fig.10_EOS-1D Mark II

トグラファーからの圧倒的な支持を得ました(Fig.10)。

当社が初めてプロ用一眼レフカメラ「F-1」を発売したのは、1971年。それから33年の歳月を経て、ついにプロ用カメラ市場でトップの座を獲得することが出来ました。アマチュア市場に続いてプロ用市場も制したことで「デジタル化を機に一眼レフカメラ市場で名実共にNo.1になりたい」という悲願を達成することが出来ました。

グローバル優良企業グループ構想 〜健全なる拡大〜

当社は、いままでにない技術を開発し、それを大事に育て、他には真似のできない事業や製品を生み出してきた会社です。しかし、1990年代半ばを迎えようとする頃、70年代からはじめた事業部制にも制度疲弊が見られるようになっていました。さらに、多額の負債を抱え、長期的視野に立った研究開発や事業の立ち上げを行うには、財務体質を強化する必要がありました。

1995年、御手洗冨士夫が当社6代目の社長に就任しました。1996年からグローバル優良企業グループ構想を推進し、「部分最適から全体最適」「売上重視から利益重視」の意識改革をおこない、当社の革新活動がはじまりました。

2006年には内田恒二が当社7代目の社長に就任しました。2011年からキヤノンはグローバル優良企業グループ構想フェーズIVをスタートさせました。共生の理念のもと、世界で親しまれ、尊敬される、真のエクセレントカンパニーをめざし、1996年にスタートしたグローバル優良企業グループ構想は、フェーズI、II、IIと財務体質を強化しながら、確実に成長を遂げる成果を上げてきました。フェーズIVにおいても「"Aiming for the Summit"~Speed & Sound Growth~」

をスローガンに、健全なる拡大をめざしていきます。

国立科学博物館の未来技術遺産に 登録された露光装置(FPA-141F)

国立科学博物館では、「科学技術の発達上重要な成果を示し、次世代に継承していく上で重要な意義を持つもの」や「国民生活、経済、社会、文化の在り方に顕著な影響を与えたもの」に該当するものについて、未来技術遺産として登録するという活動が行われています。大変光栄なことに、2010年10月、当社の半導体露光装置「FPA-141F」が国立科学博物館の未来技術遺産に登録されました。世界で初めて1ミクロン以下の露光を実現したという点が高く評価されました。

綴プロジェクト(文化財未来継承プロジェクト)

屏風や襖絵といった日本古来の貴重な文化財のなかには、 海外に渡ったものや、国内にあっても劣化防止のためや、 国の定めにより、限られた期間しか私たちが目にすること ができない作品が数多く存在します。

社会文化支援活動の一環として、2007年より、特定非営利活動法人 京都文化協会ならびに当社は、「綴 (つづり)プロジェクト」(正式名称:文化財未来継承プロジェクト)を立ち上げ、当社の最新のデジタル技術と京都の伝統工芸の技を融合させ、オリジナルの文化財に限りなく近い高精細複製品を制作することを通し、多くの人に日本の貴重な文化財の価値を身近に感じてもらう取り組みを始めました。

当社の最新のデジタル技術を用いて、オリジナルの文化 財が持つ微妙な風合い、質感までも取り込み、それを遜色 なく忠実にプリント出力します。さらに京都の伝統工芸士 による金箔や表装といった伝統の技によって細部の質感に いたるまで再現され、高精細複製品は制作されます。

これまでに多くの作品の高精細複製品を制作/寄贈して参りましたが、京都建仁寺に寄贈された俵屋宗達筆 風神雷神図屛風や、米沢市に寄贈された狩野永徳筆 洛中洛外図屛風(上杉本)など、多くの方が一度は目にしたことがある作品が多数あります。これまでの作品をご覧になりたい方は、当社ホームページにて公開中の作品案内をご参照ください。

(キヤノン株式会社 光機事業統括センター 中 亮太郎)



Fig.11_現在の 下丸子本社